

ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子

第2回「巣立ちのときは来たけれど」

アメリカの学校は、5月が年度末。卒業式、そしてそれに続く2ヶ月の夏休みが楽しみな季節のはずですが、最終学年の4年生を持つ同僚の表情は青れません。中間試験で「F（不可）」を3つとったコリンは、マリリン先生の大目玉を喰らってしまいました。学習障がいを持つ10人の4年生のうち、進路が決まっているのは、短大に進学するタマラと、

入隊予定のスタンだけ。コリンはコツコツとがんばってきた生徒ですが、得意なパソコンを活かしてプログラマーになるには、数学の力が足りないという現実が、彼の前にたちだかっています。卒業できたとしても、親の家に留まり、先住民手当で生きのびながら、ぶらぶらするだけになるだろうとマリリン先生は心配します。コリンの両親は高校を卒業していません。息子がタッセルのついた憧れの四角い帽子をかぶる日を心待ちにしている親に、留年したいとは言いだせず、コリンはわざと試験に失敗したようです。

障がいを持つ生徒の進路指導は、ベテランのマリリン先生を筆頭とするわたしたち特別支援教員の役目ですが、気の重い仕事です。ジョブ・コーチをつけて、職場体験に送り出せる都市部と違い、ここでは、親の経済力とコネにたよらざるをえません。直近の2000年の人口調査で、ナバホ・レザベーションの失業率は4割でした。状況の厳しさに加えてハンディのある生徒たちに、憧れの仕事につけるようにがんばろうよ、と励ます立場のわたしが、自分の空虚な言葉に耳をふさぎたくなるのです。

しかし、わたしたちに力を貸して下さるしくみも、わずかながらあります。昨年5月に巣立っていったブ



ロビン（コマドリ）の巣を見つけました！
（昨年夏、クレーブランドにて）

ルースは、Job Corpsという米国労働省のプログラムから、経済的に困窮する家庭を対象とした支援を受け、大工として働きはじめました。出席日数も単位も足りず、卒業はできませんでしたが、ユタ州の研修所に入り、高校卒業の資格を取り、技術を身につけることができました。Job Corpsが費用を負担し、見知らぬ土

地での受け入れ・指導・監督のいっさいを引き受けてくれたのです。

ブルースの父親は大工で、母親はアメリカ先住民にとって致命的な、アルコール依存症をわずらっていました。両親が離婚したあと、ブルースは祖父母の家に預けられました。認知症がみられる祖父の面倒もみなければならぬ毎日、焦燥し、学校に行かないことでしか父親への不満をあらわせない時期が続きました。自尊心が高く、無口で、「教えて」、「助けて」と言えないブルースの指導は、悩みが付きませんでした。Job

Corpsとのつながりができたころから、つづけて登校できるようになり、わたしと握手したり、携帯電話でのメッセージのやりとりに応じてくれるようになりました。ブルースのような若者が、ナバホ族に限らず、この途方もなく豊かで貧しいアメリカにどれほど多くいることでしょう。それなのに、共和党のトランプ政権になってから、Job Corpsの予算が238億円、労働省の職員も2割削減されたと夫に聞かされました。悔しく、残念でなりません。

「ディネ」とは…英語で“the people”を意味し、ナバホ族の人々が自分たちのことをよぶときに使う言葉。ちなみに「ナバホ」とは征服者コロンブス率いるスペイン人がつけた名前。